

井上希道

坐に先だつて

今日から道元禅師の「学道用心集」を提唱します。その前に坐禅の心得だけをかい摘んで言います。

一つに徹して我を忘れたら良いのです。難しく考えないことです。そして自分流も駄目です。一つ事に徹するには、只単純に、一つ事を続けることです。その間自らはないのです。徹すれば無我が無我を教えてくれるのです。徹するとは前後の無いことです。認めたり認識したりする自らがあつたら、徹することができないし、一つ事になれません。只することです。一呼吸を只する。単純になる。一つ事に単になるのです。是れが禅です。

初めから何も得る者はないのです。妄想を除かず、真を求めず。幻化の空身即法身。法身覺了すれば無一物。もつ是の如く結論はびしと出ているのです。求めて得られる物は、又失う物です。安心が出来るような、思想とか理念とか、考え方とか、意識とかが有りそつに思つた、とたても無いことです。そのよつなものなど何も無いのです。

只、徹する事によつて、隔たつている溝が落ちる。身と心が一つになれば前後が取れる。そつすると自然に執着の元が取れる。心の決定的安定は、たつたこれだけの事で確立するのです。

ですから単純に只一息。此だけを徹底してください。吸うばかり。吐くばかり。この単純な一息を、飽きもせず、時間の長短を見ず、出来不出来を見ず、只ひたすらする。是れを徹するということです。

是れだけの単になる事が禅です。歩くだけの単です。聞く時には聞くだけ。これが禅です。知的分別や感情を加えないのです。馬鹿と言われたら、馬鹿と只聞いて終わる。何を見ても聞いても、只その事だけで終わるから、何事も起こらない。何事も無い。一切を空にするとはこの事です。

初めから禅になって、只吸い、只吐く。是れを一心不乱にすることです。只に成ることが解脱です。本当に只を体得するのが坐禅の目的ですから、只、只、只、呼吸して下さう。

学道用心集 提唱 第一回

これより学道用心集を提唱します。先だつて、道元禅師の人となりに触れておくことは、理解に大いに役立つでしょう。七才にして四書五教を、八才にして春秋左氏伝を、九才にして俱舍論を読まれたといつ。とにかくイロは二百を超えた超天才だったようです。十三才で出家して比叡山に登り、僅か二年半居る間に比叡山の蔵書を一度精読したと言われています。そこで徹底法理を尽くした結果、大疑団が起つたのです。

「本来本性、天然自性心。三世の諸仏、何によつて修行する」と、あの有名な懐疑の句です。この疑問を碩徳の師に尋ねたが、悉く明快を得ずでした。そのために僅か十五才にして、叡山に学ぶ者無し。京の都を下りて、それから暫し碩学の師を尋ね廻りましたが、一向に埒が明きませせてせした。

遂に禅との出会いとなりました。支那から禅を持ち帰られたといつ采西禅師に紹介されたからです。言語を超え、実地に体得すると言つ教えに、道元禅師は深く感銘を受けたようです。直ぐに参禅を始めたけれど、不幸にして半年で師采西禅師が亡くなりました。

その高弟の明全に就いて六年間研参しましたが納得いかず、共に大唐国に渡り、師を求めてあの大陸を三年間彷徨

違つたのです。法理は分かり切っていますから、直ぐに本物がそつでないかが分かり、納得のいく師を尋ね廻られたのです。

言葉ですが、一切経を二度読んで頭に入っていますから、漢文はすっかり身に付いています。後は音だけの問題です。天才道元禅師にしてみますと、唐音にするだけですから数ヶ月も在れば充分だったでしょう。さほど言葉で苦心されたとは思えません。寧ろその哲理の深さと博學に皆驚嘆したと思われます。

我が門下に天才が居ます。北京語を半年で習得しました。天才の頭脳は計り知れませんが、道元禅師はとにかく博覽強記ですから、一度見たり聞いたりしたら頭脳から離れないのです。

思う師に遇えないために、諦めて帰国の船待ちをしていた時、一人の老僧に出合つたのです。これが幸いしたのです。以前一度尋ねたことのある天童山の典座和尚でした。根柢から真面目で本当の道心家でしたし、心根のとても優しく暖かい人柄のようでした。

今度は釈尊直系第五十代の祖、如浄禅師だから間違いないと聞かされて、欣喜雀躍として付いて登つたのです。如浄禅師も一見して、是れは逸材と見抜かれました。尊公は異国人なれど、法のために身を堵してある。これぞ本当の菩提心哉と賞賛して、威儀は別にして何時でもいいから、我が部屋へ来いと格別扱いです。

そこでも二年棒に振りました。何が、大天才道元をして、しかも正師の元で二年も棒に振つたかと言つてです。やはり、知性が先走つて、分かる分からんといふ觀念世界に落ちていたからです。つまり、自分の知性に自信を持っていたため、それが自我となり邪魔をしていたのです。この事に本人はなかなか気が付かぬものです。

知性は、分かること分からんとの両極に分離する機能ですから、分かること分らないことを分離しては、分かること知を巡ります。こつして知的廻転を繰り返す。殆ど永久運動です。ここから脱出しな限り、死ぬまで是れを続けるのです。

即ち、自分の一念すら如何とも出来なくて葛藤惑乱して苦悶するのです。感情やイメージ貪瞋痴からは免れることは出来ないといつては、今地球上で起つている争ひ事は、皆この精神の所産です。

道元禅師が決定的に幸いしたのは、炎天下で椎首を干していた痛々しげな老僧の姿を見て声を掛けたことでした。

「その様なことは貴方が為すものではないでしょう。若い雲水にして賣つては如何でしょう」と。すると老僧は、「他は是れ我に非ず」と。思いがけない言葉が返つてきて、道元禅師ははつとしたことでしょう。人のした修行は人の修行であつて、私とは関係がないではないか。そもそも修行とはさういふことではないかと。しかし縁が無い時は無いものです。本当はこつで恥じ入らねばならぬのですが。

「こは少し日が傾いてからにされては」と。娑婆心丸出しをしたのです。相手を見ての親切は、娑婆的には心暖かい思い遣りであつても、仏道修行となると、単なる凡情であり煩惱ですから、この老僧が放つておくわけがない。

曰く、又何れの時をか待たん」と。修行するといつて何時するのだ。今するしかないではないか。それとも別に修行する時と言つものが何処かに在るのか。在るのなら、今此処へ出して俺に見せよ――。この一句は道元禅師にそのよつに聞かされたのです。この言葉が道元禅師をして、着眼を決定付けることになつたのです。言葉を追いかけていた自分が落ちて、本当の端的に気が付いたのです。

あつそつか！ 本当の急所とは、今、この瞬間だったのか！ と。ここが大切なのです。端的とは此処です。言葉以前の世界、前後の無い解脱底です。これが分からない限りの修行でしかないのです。

彼が十三で出家をして、この事に気が付くまで十五年掛かっています。縁が有つても時節が来ないと気が付かないのです。屢々今しかない、即今しかない、只すればいい、初めから前後は無いと言つことは充分知っていた筈です。法理は分かり切つても、本当の今、この瞬間に気付くことは、今の今まで無かつたと言つては、

それから旬日を経ずして大悟されたのです。

その長きに渡って苦しみ続けた迷いの修行時間に対して、自分の苦しみをみんなにさせてはならんと、大悲を尽くして書かれたのが、あの正法眼蔵九十五巻です。彼の根底には大法重きが為に深い存念があつたのです。勿論解脱底の彼には、些かの執着や後悔など有る筈が有りません。ただ、自分の修行を振り返つてみた時、全てが正しかつたかどうか。当然この事は充分反省したのです。自分が失つた無駄な努力と時間とエネルギーに忸怩たるものがあるのです。この端的にもっと早く的確に気が付いていたら、その方法さえはつきりしていたらと、俄然道元禅師はこの問題に存念を絞り込みました。

あの膨大な正法眼蔵が生まれた理由は、正にこれです。苦しみあぐねた長い過去の反省からです。普通の人のなら、箇事究明、大事了畢の決心を得たら、廓然たる即今に大満足している筈です。

ところが道元禅師は全身是れ慈愛の人ですから、大法重きが故にこの正法護持は全人世必須の課題でした。大法しが無道元禅師にしてみれば当然のことです。

法を思うが故に、あの手この手と、あらん限りの法理と知力を尽くして後人のために南針を垂れたのです。彼が思うところのものを、悉く文字化し、理を尽くされています。是れでも分らんのかと言わんばかりです。正に道元禅師の暖皮肉です。血滴々です。

五十五才で示寂されましたが、その間、永平寺開闢、造営、鎌倉下向等色々在る中で、九十五巻の大著述をするとなると、大衆説化以外の時間は、殆ど執筆の日々であつたらうかと、その御労苦を深く敬慕する次第です。

思えば、食事情も悪く、あの湿気が多い環境に加え、日の出は遅く早い日没となると、陽当たりは悪いに決まっています。適正快適な状況とはほど遠く、最悪に近い状態と言えましよう。運動不足もあつて、肺病に罹られたのも無理からぬ事です。一代孤雲禅師は頑健でしたから長命を得たのです。

「つなりますと侍者の力量が物を言います。お側にて、充分に注意し気を付けなければなりません。イエスマンではいけないと言ひやうです。」

「執筆も確かに大事です。が、御法体護持されて一日も御長寿の上、一人でも多くの法の人を育てることこそ、本當の仏祖への報恩底ではないでしょうか。どつちが大切ですか」と説得するのは、道元禅師は真心の人ですから、必ず法の意を汲んで下さいます。そしてより法のために振る舞われたかと思ひます。

又道の人は出された物に対して、生臭いとかベジタリアンでなければとか、何とか漢とか言ひません。感謝で何でも「食べますから、そつと滋養の物を差し上げていたら」と思ひます。玉子然り。魚だつて蛙だつて鳥だつて、ふんだんにあそこなら居た筈です。それらを折々に捕つて大法の法体を擁護する、これ大切な菩薩行なのです。そんな殺生な事など言つものなら、それが大殺生罪であり謗法罪です。地獄に入ること矢の如しです。

庭に来て落ち本能拾つ雀らが、鷲(衲わたし)の心をいかで知るべき

釈尊は両親妻子国を捨て、一祖断臂、南泉斬猫、俱胝小僧の指際断、六祖捨母、通幻の活埋坑など、皆大法重きが為に身を捨てての大悲大慈です。罰も又空と体達した真骨頂の境界であればこそ、生死涅槃を超越し、換骨奪胎せしむることが出来るのです。

「つした人天の大導師を擁する事、国を挙げてしても尚足らず、粉骨碎身も尚及ばずです。この事を良く理解しておいて下さい。大乘の慈悲は、とても小乗の戒律主義などの及ぶものではありません。病氣などを運ぶ鼠や蠅、ゴキブリは的確に捕獲等して処置するのが大乘の精神です。殺すべきを殺さなければ罪です。非実行すること人が死ぬからです。間接的に死なせたことになるのです。殺すべきと言つことは、人間の實生活で災いを為す時のことです。そこではなくて、例外なく徹底的に殺すことは悪平等で、殺生戒に触れるのです。」

さて、如実に参究するに当たり、道元禅師のあの膨大な祖録に参じなければと取り組んだら、言語的理解をするだけでも、一般の人でしたら一生悠に掛かります。道元禅師の著作一切は慈悲落草です。全く無用となること

を望んでいるのです。つまり、真実の人、隔ての無い人に成ることです。成れば無用の長物で、邪魔物、余計な物です。

そのための地図ですから、一二で良いのです。全巻の内容は皆、真空を解き、只を示めされているのです。ですから同じです。言い方が異なるだけです。

従って時間の兼ね合いからして、修行に必要な見やすい地図を選別して上げるならば、先ずこの学道用心集です。全体が十章から成っていて、勿論漢文です。修行者の大切な心得を用心として解かれています。

そして普勸坐禅儀です。学道用心集が心得の指南書なら、普勸坐禅儀こそ修行のための実践指南書です。ここに存念を具体化して心血を注ぎ、経験からの理を尽くされた絶妙の法書です。具体的な坐禅の指南書としては、普勸坐禅儀以前に普勸坐禅儀無く、普勸坐禅儀以後に普勸坐禅儀無しです。これに従って行すれば良いのです。私の提唱を良く読んでもうえば、誤って理解することは無いでしょう。

更に随聞記。これは修行者として、宗教家として、人間としての心得です。道元禅師が理想とする姿で示されています。是れも必読の法書です。

今手にする必要はありませんが、更に提示するなら、現成公案、仏性、有時の各巻でしょうか。時が惜しいので外は後回しにして、とにかく行する事です。この事も道元禅師の真意なのです。実践努力無くして道元禅師の真意も仏道も分かる筈はないのですから。

とにかく彼は博覧強記です。一度眼にして耳にしたら忘れないと言つ頭脳ですから、事例が多く出てきます。それらはいくまで、次の要点を深く暗示して、本分をより分かりやすくする論法の一つです。だから、例えに対して深い理解を求めないのです。横一に引きずり込まれますから。

伝えよう分からせようとしていて、何処までも端的です。手元足下の真実です。最も簡単にして、難易も是非も無い世界が道であるのを知りたいのです。ですから、喻えはなかりと飛びますから、文字に囚われないようにして下さい。神々しい言語は、なついても知性を刺激しますから、これは理解しなければいけない大切なことだと思つてしまいませんか。その知的癖があるので、皆引つかつてしまい、分かるために別に又多くの書を漁るようになるのです。

道元禅師御自身、知的好奇心大勢ですから、多くの天才の書物に触れて来られました。だから、言っておきたいことが有り余っています。判断力も批判力もずば抜けていますし、生来高貴性に富み純粹無比のお方ですから、法のためとは言え其の非なる点を指摘する、その鋭さは徹底しています。この事も承知をしておいて下さい。

第一章。菩提心を起すべき事。

これが大事なのです。初発心が方向を決定するからです。志が純粹かどうかで、道に入れるか否かです。同じ努力をしても、逸れてしまつては大変です。初発心には充分気を付けなさいと言つ事です。

「右菩提心とは、多々一心なり」

一心とは自分そのもの、心そのものです。本来の心です。色々の言葉があるが、畢竟本来の自分であり一心の心です。つまり、是の心の正体を見届けることが修行の目的です。そのために正しく努力することを菩提心と言つのです。多々一心なりとあるでしょう。言葉に用はないのです。惑わされないようにして下さい。あれこれ名前や言い方が有つたとしても、それは問題にするなど。本当に歩く時、そのような者が果たして有るか？ 本当の一心を参究するのが菩提心なのです。

「竜樹祖師の口へ」

釈尊十四世の祖師です。二三世紀の人で、中論で名高く、大乘仏教を哲学的理論付けをした始めての祖師です。とにかく理に強い方で、著書も沢山あり、次の句は最も彼の法に対する姿勢を現しているものです。道元禅師

もいたく共鳴した絶品の句です。

「三世間の生滅無常を觀するの心も又菩提心と名付へど」

全て消滅流転しています。吐く吸う。少しも留まっています。止まっただけで、人間も動物も居なくなってしまう。朝起きる。夜寝る。その間の様子を見れば、生滅無常であることが良く分かるでしょう。これが因果無人の自在な様子です。この宇宙は無常であり流転しているから命が育まれるし、森羅万像が生まれたのです。是れを因縁性空とも言い、假和合とも言います。今、仮にと言つては、是の今が、仮ながら是れが本来の今の様子です。そしてこの流転の様子は消滅しないのです。つまりこの今は永遠なのです。

たまたま、仮に、条件によつて今生きて居れる。この怪しげな存在を、先ず良く理解することです。生滅無常だから、どんな事をしてみてもこの身は忽ち朽ち果てる。この恐ろしい事実を良く知れば、他の頼むに値しないことが分かる筈だ。こんな自分では安心出来るわけがないと自覚すれば、大切な時間だから怠惰に過すわけには行かない。自ずから真実の道を究めたい心が湧き出て、菩提心となり、求道心となります。だから、世間の生滅無常を觀するの心も又菩提心と名付へど。

「然らば乃ち、暫くこの心に於ける菩提心と為すべき者か。誠にそれ無常を觀するの時、吾我の心生ぜず。名利の念起らば」

道元禪師は痛く竜樹に共感されたつもりです。現実の無常が実感として魂に觀じた者でなければ、本当の菩提心は起りしめ。何となれば、本当に觀じたら、貪りとか妬みとか、貪瞋痴等々、煩惱や吾我の心、名利の念など起る隙間が無くなる。本当の菩提心が起れば、自ずから口口の無い端的が解るのです。だから本当の菩提心が大切なのです。その心なむ。

「時光のはなはだ速やかなるを恐怖す」

迷いに迷い、日々、時はかりが過ぎて行くことが恐ろしい。生まれてこのかた数十年を経て、次第に死に近づいてきた。俺はこのままが良いのか、腹の底から本当に思ひ出したらどうして居れない筈だ。本当に時の過ぎるのが恐ろしい、と分かる者は救われる。畢竟お前はどうか。未だ發婆事につつまを抜かしているのか。

「所以に行道は頭燃を救ふ」

行道は本当に道を求めることです。畢竟どうするか。頭に火の粉が落ちて燃えだしたら、文句なく忽ち両手で払い除けて消し止める。誰でもそうするでしょう。そんな時、あれこれの余念が有るか。躊躇するか、絶対にしない。これが菩提心の働きです。これが行道なのだ。だから煩惱妄想の炎が起ったら、直ちに払いのけ切り捨てなさい。つまり、真剣に即念を守り、本来の端的を守るのが本当の修行だと。菩提心は即行、即端的、即真です。

「身命の卒からゆるるるを顧眄す」

身命とは身命です。この身体や命なんて脆いものです。普遍の確固たるものは何も無い。あつと言つ間に消えてしまつた代物です。娘が、お母さんが苦しんでいると電話してきました。行きましたら苦しんでいました。抱えてほんの少しした時、首がだらりと落ちて、それで終わった。

我々修行者は生き死の本質を究めるのが目的です。だから、そんなことで驚いている暇は有りません。生死とて日常の様子です。出た息が入り、入った息が出る。起きたり寝たりと同事です。あつ、矢張り人事ではないかと。ただそれだけの話です。皆さんとて、誰も皆同じですからね。大切な人や、愛する人が、あつと言つ間に死に神の餌食になるのです。何が本当に頼りに成るのか成らないのか、この事を先ず肝に銘じておけと言つては、顧眄は振り返り見るということです。

「所以に精進は翹足に憤らむ」

翹足とは爪立ちです。立つて待つことが出来ることです。いよいよ菩提心を起こして師匠を訪ねて行った。あいに師匠は所用で出かけた。そしたら居ても立つてもじっとして居られなくなり、今か今かと師匠の帰りを爪立ちして待っていたという故事です。美風として感心するのではなく、本当の道人はそうでなくてはならないのです。

釈尊が或る夜、夢で観音様が自分を励ましてくれたのです。挫けそうな自分にとってそれが嬉しく有り難くて、一週間ずっと爪立して、立ち去った方を拜まれたといつのです。当然そればかりだったので、余念が落ちて一心に成り、清淨になつてゐる自分に気付かれたのです。つまり、現実として心の縛れがほとと取れて楽になつたのです。それが余程有り難かつたのです。取り分け大切なのは、こうして修行の取掛かりが分かつていくことです。元は菩提心です。

平素、真剣に求めるならば、自ずからその様に成るのです。だから本当の菩提心がどれ程大切かを良く自覚しなさいと、強調してゐるのです。それでなければ物には成れないからです。

菩提心と簡単に言つが、次のことが出来なければ本当の菩提心ではない、よく聞けよと言つ真意を見逃してはなりません。道元禅師の心に成れば皆見えるのです。「これを言はず語つていつのです。

「たゞえ緊那迦陵讚歎の音声を聞くと、夕への風耳を払つ」

緊那迦陵讚歎の音声とは、身も心もこぼれてしまひそんな程美しい音色。音楽や鳥の声、甘美な歌声などです。そのよつな素晴らしき音声であつても、翹足の求道者にとっては、夕方の風が耳元を吹き抜けるに過ぎない。心を取られず、「口」聞て終わるよつ努力しなさい。それほどなものを聞くと、心に一切問題が起らない。何の執着か是れあらたです。聞く底です。「の時、聞く音も無く聞く自らも無い。只聞く時、一切の音声、皆緊那迦陵讚歎の音声に非ずやと参究するのです。耳が緊那迦陵と思つるか？ 耳が讚歎するか？ 菩提道心は耳の端的に参じ即今底に参ちんじむ。

「たゞえ毛而西施美妙の容顔を見るも、朝の露眼を遮る」

「これも同じ例です。見聞覚知の消息を気付かせよつとの慈悲です。毛而西施美妙の容顔とは、猛將軍や堅物官僚の心さえも掻き乱すほどの絶世の美女です。例えそんな刺激的な人が目の前に現れても、只見よ。心を盗られるよつな、幻のよつに忽ち消える朝露の如く、眼の仮にしておけ。心に持ち込まなければ即端的だぞと。端的は見ながら眼の無きよつです。見る自分の無きよつです。

大燈国師は二十年の間、乞食隊裡に紛れて聖胎長養されたでしよう。その時に詠んだ歌が、

五條京架の橋の上 往き来の人を深山木に見よ

深山木なら何心無く、只「見よ」でしよう。往き来の人を見るのも、その様に「只「見なさいと言つ道歌です。同じよつに天桂禅師は、

五條京架の橋の上 往き来の人をそのままに見よ

同じ事です。つまり、計らわずそのまま「只」と言ひつです。この大事な急所が会得出来たならば、と続くので

「すべし声色の繫縛を離れば、道心の理致にかなわんか」

声色の繫縛を離れば「は」「只」「見」「只」「聞」ならばと言ひつです。見聞覚知に心を盗られなければ、既に道の人であるぞと。そのままで行道するならば、道心の理致にかなつてゐると言える。「これなら本当の菩提道心の様子だから、祖師方の心に叶て合格点だよ。

「往古来今」

昔より今日、そして尽未来に到るまで、全ての人たちが

「或は寡聞の士を聞き、或は少見の人を見るに多くは名利の坑に墮して」

支那の科挙は登竜門で、名利栄達を得る公的手段です。一生懸命勉強するのは何故か。それに合格して役人になり、良い立場を得て栄耀栄華に暮らすためです。そのための努力は単に欲望追究に過ぎず、煩惱の繫縛を離れて真箇の成功を修めることとは全く違つ。その言つ風な名利の坑に墮したら大変なことになるから真似てはな

らなさい。
「永く仏道の命を失す」

かよつな者と成つたら所詮浮かぶ瀬は無い。欲望を好くし、我を元として貪瞋癡の奴隷になつてしまい、解脱の法門は思いも及ばぬ事だ。よくよく反省せよと。井原の平四郎は心清淨にして、よく修行者の外護をしていた。ある日、法堂の勇猛の衆生成仏一念に有り。懈怠の衆生涅槃三祇に渉る「の句を見て奮然とし、無字三昧に成つて三日三晩でぶち抜いたのです。菩提道心を起こし、永く仏道の命を得たのです。

「哀むべし惜むべし、知らずんばあるべからず。縦ひ権実の妙典を読むことあり、縦ひ顯密の教籍を伝つることあるも、未だ名利を抛たずんば、未だ発心と称せず」

尊い生涯なのに、悶え苦しんで死ぬばかりの浮かぶ瀬の無い人世をするとは、真に惜しいことだし哀れなことだ。知らずんばあるべからずの句は、上にも下にも利いている。「この事を良く知っておけと今までに掛かるし、これから私の言つたことを良く聞けよと後にも掛かるのです。

権実・顯密の二つを掲げ後を省略して、喩え天台や真言やその他諸々の經典教籍などに、幾ら精通しても、未だ未練がましく名利を貪つているようでは、とても発心とは言わさぬ。道元禅師は内心、喩え仏祖が許しても、是の俺はそのような不純な者など一切認めぬぞ。何が発心だ。正法眼藏、涅槃妙心、解脱の法門を何と心得るかと言いたいのです。「これこそ道元禅師の真骨頂です。

本當の発心とはと命題を暗示しておいて、祖師の言を次に出して徹底検証するのです。如何にも道元禅師らしい純粹一途の徹底振りです。

「有が云く、菩提心とは、無常正等覚心なり。名聞利養に拘わるべからず。有が云く、一念三千の觀解なり。有が云く、一念不生の法門なり。有が云く、入仏界の心なり」と

無常正等覚心と難しい言葉を使つておりますが、つまりは菩提心とは解脱だから、名利に拘わらない。とか、一念が縁に依つて無限に働く、即ち「の」ことを知る「と」だ。とか、「一念も起らぬ寂とした心だ。とか、涅槃の心。とか、古人が色々な菩提心に就いて言つてはいるが」と。「これらの言に対して、そろそろ道元禅師が論攷反駁して正邪を正すのです。正に天下第一の最高裁判官が、正法法廷で裁く見事振り。罪條は菩提心の真偽です。

正法を任ずる者は、切に高祖の意を看取しなければならぬと云ひます。「是の如の輩は、未だ菩提心を知らず、狼りに菩提心を謗す、仏道の中に於て遠して遠し。試みに吾我名利の当心を顧みよ」

仏祖の消息である即今底の端的を究了するために命がけの努力をする。これが祖師の言つ行道であり菩提心である。ところが「わたりの輩は自らの菩提心の理をえ知らず、全く真実を知らずして、徒に菩提心を論ずるが皆出鱈目で、単なる理屈に過ぎず、全く取るに足らぬ。今、この瞬間、仏道ならぬ者はないのに、この体たらくは何としたことか。菩提心に対して大いに罰当たりなようだ。

人は知らぬ。だが、この道元だけはそんないい加減なまやかし文句に誤魔化されたりはしないぞ、との大抱負が照魔鏡となつて後人のために道を照らすのです。

さ、此処から道元禅師固有の手腕で打つて出るので。正邪を見分けるために、「試みに吾我名利の当心を顧みよ」と頂門の一針を刺して、我等の足下へ注意を促し、実参実究の着眼を得させべく仕掛けたのです。

試みに、見る今、聞く今、この瞬間、何者が有るか、深く参究して見よ。
吾我とか名利とか、是非や善悪、自他凡聖等、有るか否か。

有るなら当にその心を、無いなら当にその心を、今、此処に出して見せよ。と詰め寄つて即今底を促したのです。実地が問題なのです。「」です。「の切実な」を真剣に参究するのです。吾我名利のみならず、如何なる念であるか、当にその心は如何と顧みるのです。

「の心、何れより来る。と参究するのです。「の努力心には一切の吾我名利など無いでしよう。道心とは、菩提心とは是れを言つのです。これがが仏道に叶つた、生きた修行なのだ。」

「の菩提心があれば煙草を止めることなど簡単です。吸いたたい心が出たら直ぐに「の心は何処より来る？」と

深く参究するのです。真剣に三日もすると、吸いたい念に気が付いた瞬間、スカッと切れて何の執着も残りません。何なく止められるのです。正に菩提心の賜です。志如何です。念の元、心の元などは何処にも無いから、即今底を護つておかれれば、自然に心の癪が切れるのです。

「一念を解決しなければ、真の平和は得られる筈が無いのです。正に急を要する根源的課題です。けれども世界的に皆知的教育ばかりだから塚が明かないのです。元々が動物であり弱肉強食の性を内在しているから、これを携えている自己を超える必要があるのです。でなければ縁に従つて直ぐ飛び出してくる代物です。」

通常では皆、今今の縁に応じて何事も有りません。相克関係が無いからです。今ここに、不特定多数の者が時を同じゆつして頭を集めておりますが、出会い頭に喧嘩したり殴り合つたりしますか？ する筈が無いのです。敵対心や恨みの念が無ければ、何事も起らないのです。

ところがそうした怖い念が出てくると、念が念を刺激し問題が起きて葛藤し、厄介なことになります。ところが、「当心や如何に」と参究するならば、内在していた過去の猛毒は、自ずから無害化して、当人を平安たらしめるのゆゑ。

「念が無念であれば一切問題が起らない。世界の平和は自分の心を決着すればと訪れるのです。この根本は、当心や如何に」と参究努力することです。これが本当の菩提道心あり本當の修行です。

「一念三千の性相を融するや否や。一念不生の法門を證するや否や。唯だ貪名愛利の妄念のみ有りて、更に菩提道心の取るべき無きやせ。」

「よほど道元禪師は結構に臨むのです。道元禪師は自身、さほどに苦しんで来たものですから、大切な要点を確実に動機付けるために、「いついつ激しい言ひ方をわざとされるのです。」「これが道元禪師一流の慈悲であり情熱です。」

今は今にして今ではなご。一念三千の性相とか、一念不生の法門とかは、既に心情流注で業識ではないか。端的にそんな言ひやせをしたものが何処に有ると言つのか。と判決理由を述べて、「唯だ貪名愛利の妄念のみ有りて、更に菩提道心の取るべき無きやせ」と判決を下したのです。

貪名愛利とは煩惱を初めとして諸々の妄念です。隔てから起る奴です。自我の妄念が、心中うつろひしているではないか。何処に菩提道心の欠けらうらうらきも有ると言つのか。みな偽物じゃと、無期懲役を申し渡しても、それと浄度のための方便を垂れるのです。

何が故ぞ。一たび発心惨悔して自未得度先度他の心を起せば、一切衆生の導師となる器であり、罪も又因縁性空だから一転すれば光明なるのです。

「古来得道得法の聖人、同塵の方便ありと雖も、未だ名利の邪念ありず。」
間違えてはいかんど。古来の聖人も方便として同じような言葉を使つてはあゝるが、真空妙有を得た純一無雜の聖人方は、名利の邪念などうの毛程も無い。だからそれらの輩と一緒にするなよ。

「法執する世ほなご。」
求心も清淨無垢の信念等も、無我も悟りも、持つたら災いを為すので煩惱と同じです。これを法執と言つてです。端的には何者も無い、無いといつ者も無いのです。

嚴陽趙州に問つて曰く、「一物不生來の時如何」。師曰く、「放下著」。嚴曰く、「既に是れ一物不將來。是の何をか放下せん」。師曰く、「放不下ならせば擔取し去れ」。嚴此処に於いて言下に大悟す。

何者も無いところの、大事な端的に漕ぎ着けても、それを持つたら煩惱に如かずや。無いといつ有我ではないか。是れを法執と言つ。師曰く、「それを捨てよ」と。嚴曰く、「既に何者も無いのですから、是の何を捨てるのですか」。師曰く、「そんなに無いと言つ者が好きなら何時までも担いでおれ」と言われ、大きな法執が此処で落ちて、嚴陽は大悟したのです。何も無いといつ者も超越し、永久と無限をも超えて大法の人となつたのです。

「況や世執をや」

当然のことです。「」は良く分かりますよ。

「所謂菩提心とは、前云ふ所の無常を觀するの心、便ち是れ其の一なり。全く狂者の指す所に非ず。」

所謂菩提心とは、今まで解いてきたことだ。其の二つとは、始まり、元、純一無雜の端的です。即今既にそれです。求めるものでも、得るものでもない。「」の事を知らない無眼子の連中が、恰も尊い高尚な道理が有りそつに言うて居るが、「」の道はそんなものじゃない。

「彼の不生の念、三千の相は発心以後の妙行なり、猥るへからざるか。」

邪師の言う不生の念とか、三千の相とかは、隔てが取れて端的を行することが出来るようになってからの話だから、いつかり取り付くなよ。騙されるから。」

「唯だ暫く吾我を忘れて潜かに修す、乃ち菩提心のしたしきなり。」

唯だ暫くは軽く見る。とにかく何もかも打ち捨てて、我を忘れて即今、「只」を練りなさい。内側から発してくる求道心に基ついて、今今、「淡々」と行いなさい。これが出来れば真実の菩提心だから。

趙州禪師に、新参者が、自分が入ったばかりで、どのように修行したらよいのか分かりません。どうか教えて下さい」と正直に懇願した。「」の素直さ、「」の正直さが、「」の真剣さが菩提心の血肉です。州曰く、「お粥を食べたか?」。僧曰く、「はい、頂きました」。州曰く、「じゃ、器を洗えば宜しい」と。唯だ暫く吾我を忘れて潜かに修す、乃ち菩提心のしたしきなり。何処にも吾我はない、唯道有るのみ。「」の端的を見て取らねば菩提心とは言えないのです。「」僧、此処で菩提心の何たるかが分かったのです。

「所以に六十一見は我を以て本と為すなす。」

六十一見とはインドに沢山ある外道の見解です。お釈迦様が仏道を掲げるまではバラモンの全盛期でした。バラモンの哲学、宗教觀は相当のもので、知的には大した者です。そつした沢山な法門も、知的解釈に過ぎないから皆吾我妄執の上での狐狸窟じゃとつて却下したのです。「」つた物には触るなと言ひつひす。

「若し我見を起すの時は靜坐觀察せよ。」

もし世念凡情が出て即今の端的が護れぬようだったら、その時は深く靜室にて坐禅しなさい。觀察せよとは、念がぼんやり出たら、問髪を入れずその元を尋ねていけ。瞬間の出来事故に、一瞬を見逃すなと言ひつひすです。前述の「」心や如何に」と參究する言ひです。

更に言えは、「こぼり動く」を止め、求める「」を止めて、勉強することを止め、身に為す「」を心に想う必要の無い「」にして、靜かに坐せ。要するに何もするなさい。

目的を持つと仮想の結果を想定する。そしてそれを達成するために、手段段取りを考えよ。目的と結果は同一の未来にイメージを作り出します。「」を全て虚像の世界です。勿論計画として考えるべき時は、これは煩惱ではありません。けれども空想世界は虚像ですから、決して本来の今と重ねては成らないのです。

「」が目的としての仮想の結果を掲げて、それに向かつて行為する身体は、今、今確かに現実です。だが心は現実の今から離れて虚像空想の世界です。これが身と心が離れて惑乱する、混沌の構造です。

「」の状態である限り、煩惱の芽が枯れることは無いのです。だからとにかく何もしないことが最善の解決策です。求める必要がなければ心を持ち出し觀念を動かす必要がない。だから自然に心身一如と収まる時節があるので、だから靜坐せよ。そして或る時には次のように觀察せよ。

「今我が身体内外の所有。何を以てか本と為んや。」

今、自分の身体と心。自己と環境との現象。様々な作用。これらは一体、何が本質なのか、しかと參究してみよ。本来本法性、天然自性心とあるが何んだらうと。

知らずして生まれ、知らずして言葉を覚え、知らずして見、知らずして聞く。知らずして大きくなり、知らずして恋をし、知らずして老いる。そして知らずして死ぬ。何が本でこのように自由自在に作用し活動するのだろうかと參究し、安易な気持ちで過いられないことです。何となれば、菩提心が弱まると即見聞覺知に翻弄されて心が濁

れるからです。濁れるとは吾我執着に落ちると言ひます。

「身体髪膚は父母に稟く、赤白の二滴は、始終はれ空なり。所以に我に非ず」

「この身体は自分で作った者でも何でもありません。父母の縁に依って、知らぬ間に生まれてこの様な身体に成つたものです。赤白とは赤白です。赤は血、白は乳のことと思えばいいです。血は女性の象徴とか、白は男性の精液とか。今はそんなことはどうでもいいのです。「この身体の事を言っているのです。我々は因縁所生の法に拠り、不可思議な縁に拠る假有なる者であり、始終はれ掴み所のない空なるものです。それが証拠に、自分で作った処の物など何処にも無いでしょう。本来自分と言つる者は無いのです。自分だと思つているものは、「この身体への執着心です。」

つまり、その縁に依つてたまたま我々の身体があるだけなんだ、と言つ話します。じゃからこんなものは縁次第で、何時はうと消えて無くなるか分からない、真にあやしげなものです。だから何事も、只「して吾我を離れなさい」。

「心意識智、寿命を繫ぐ、出入の一息、畢竟如何、所以に我に非ず」

心意識智は精神作用です。寿命を繫ぐとは、色々あつて「いつか」と考えを巡らせて、生きていくことを実感するのです。心意識智が亡くなると、自覚が亡くなつて生きていく実感は無い。つまり、自分についての寿命では無くなるのです。これは精神面のこと。出た息が入らなかつたり、入つた息が出なければどうなる。生死共に縁の者ではないぞ。手近な身体の様子を、正しく素直に見れば、自分と言つべき根拠など何も無いことが分かるであろう。「このきりぎり一杯の切実な所」に「いつか」と自分にかけて見よ。

「彼此執すべき無きをせよ。迷つ者は之を執し、悟る者は之を離れ」

仮に身体と精神を二つに分けて解いてみましたが、何れも執着すべき確固たるものなど無い事がはつきりした筈です。「この点をもう一度よく観察して納得しておきなさい」。

然るにそれでも迷つ者は、絵に描いた餅と本物の餅と見分けられず、何処までも吾我に執着して苦しみ、悟る者は実と虚とを正しく分別して、我執を離れ安樂を得るのだよ。

「而もに無我の我を計し不生の生を執し、仏道の行すべきを断ぜず、世情の断すべきを断ぜず。実法を厭ひ妄法を求む」

なのに、吾我を立てて無我を求めたり、又念が起きないやうに計つたりする。心が騒がしく苦しいこと、いつしても雑念を取つて早く楽になつてしまふものなのです。「これは矢張り自己を正してこの心、悟れぬのです」。

求める吾我が有つたら、端的に自覚められぬ。いつしてこの事が分かるのか、深く深くそのことを観得せよ、と言ひたげです。いつして修行を怠せに出来ぬ故也。

世間は吾我の突つ張り合ひだから、妄執対立が普通であつて、真実を言とする道は嫌われても仕方がないが、仏道としてはとても認めるには出来ない。「これは本當の菩提心が無く、本真剣で即今底を行じないからであり、世俗の念を断ぜず凡情に遊んでゐるからです。いつした輩は根本が濁れてゐるから、真実の法を疑ひ恐れて退けたりするものです。そして邪師の解く妄法を信じてしまつ。実に哀しむべく恐るべき事です」。

「豈に錯らねんや」

「この句で、第一章「菩提心を発すべき事」の最後です。実に切実なる獅子吼で締めくくつています。これを過ちと言わなくて何と言えは良いのだろう。本當の仏道を行じない限り世情を断ずるには出来ないし、従つて名譽物欲金錢欲の汚辱に苛むことからは抜け出されぬ。「この事を悟る者は之を離れる事が出来るが、迷つ者は過ちを改めることが出来ない。豈に錯らねんや」。

過ちを過ちと知る、是れ道の人。過ちを過ちと知らず、是れ凡夫。過ちを過ちとせず、是れ狂者。とにかく早く真箇の菩提心を起こし、實地に行するしかないのです。是れを看取する者果たして幾人か有る。参。

三時が一寸過ぎました。今聞いた全てを綺麗に忘れて、今、只、淡々と。再び打坐して下さい。これは解脱の必須条件であり基本です。

茶礼会

味その物にならなくて下さい。頭で味を追究してはいけませんよ。味その物に尋ねていくんです。じっくり味わうんです。味その物に自己が有るか、煩惱が有るか、是非善悪があるか、迷いがあるか、前後があるか。

「これを百分の一秒、千分の一秒という鋭さ、綿密さを追究していくのです。これを味に参する」というのです。言葉を変えたら、味に徹するということ。是非を味合いつつ下さい。

私の隣りにいらつしやうなご住職は、昨年暮れに、京都の会議が終わって帰る時に、新幹線の中で出合った方でありませぬ。驚いたことに、隠老師から義光老師、義行老師、原田雪溪老師などご存じて、而も宗派が違つたのですよ。

流：私は先ずこの事に驚いてしまいました。それで又、お人柄に驚きました。実に高潔にして爽やかで、いさぎよく、それで別れました。その後、奥さんと、奥さんのお母さんと二人で少林寺道場に現れたので、二度びっくりです。その様なお方です。自己紹介をして頂きます。禅に対する、些かの造詣もお有りのようで、お伺いしてみたいと思います。いきなりで恐縮ですが、では。

井上老師とは、本当に、ご縁なのでしょつか。ほんのちよつとずれると見えなかつたのでしょつか。京都のお帰りにお会いしまして。私は眞言宗なのですけれども、兄弟子も禅を習っていたので、その時に、義行老師のお話も聞いておりまして、自分の修行の功夫と言つことに就いてです。自分のお師匠さんには申し訳ないんですけども、それ以上に、功夫の事で力強く影響を受けました。

私も井上老師とお会いして、義行老師の話が出た時は、本当に自分でもびっくりして、まあ、派は違いますがけれども、自分の問題を解決すべき事というのは、何も変わらないので、そういうことに関しては何の抵抗もわだかまりもありません。

ですので、今日は老師がお出でになると言つたので、出向いて参りました。今日のお話を十分に噛みしめて、もう一度、自分に問い直してみたいと思います。

私は埼玉の狭山市に居ります。流ともつします。一文字で「流」と書きます。

老師：東京の参禅会の、今日の雰囲気というか様子をご覧になつて、どう感じられましたか。

流 老師：先ず、大勢なのにびっくりしました。私も色々な参禅会に出ていますがこのように真剣な気持ち皆さんびつたとされているのは初めてです。見たことは御座いません。一月に一度あるとお聞きしましたので、又来させて頂きます。

何れにせよ、自分の問題ですから、人のことなど気にされず、肝腎なこととはどこか質問されることが良いと思います。是非、この雰囲気大切にして下さい。

老師：有り難うございました。一度聞いたら忘れないう名前だと思ひます。本当に小気味のよい人柄で、正しく禅そのものの人だなと実感します。これからは、深い法友になつていくのではないかと思ひます。宜しくお願ひ致します。

それから、伊藤先生。ちよつとお立ち頂きますか。今日この為にはわざわざ広島から来られました。その主旨は、先般パリへ行くに当たつて皆さんから頂戴したカンパの御礼と同時に、行きました内容報告を是非して、御恩に酬いたいとお出で頂きましたので、早速ながら先生の方からご報告をして頂きませう。

伊藤：伊藤と申します。十二月には皆さん、カンパを頂きまして有り難うございました。スタンス・サンという方が、少林寺で参禅されて、その参禅記を書かれるに当たつて、又諸々の開けのためにフランスへ行きました。その時の写真が有りますので、ご覧になつて頂きたいと思ひます。

スタンス・サンはカトリックの古い教会の中のホテルに居まして、私もそこでお世話になってきたんです。大変良いところですよ。後は質問して頂ければ、お答えいたします。老師の方から、具体的に、質問して頂けませんか。

老師： 何時行かれて、何時帰られたのでしょうか。

伊藤： 十二月の九日に発ちまして、四十日ほど、フランス、ポルトガル、そして又フランスと滞在しました。

老師： ずっと教会巡りだったのですか。

伊藤： フランスは前後二週間、スタンス・サンと共にそこへ居ました。前半は、十名ほど、ヨガをしている方達と親しく、少林窟を紹介させて頂きました。

老師： …では内容に入りたいと思います。ヨーロッパはキリスト教文化でございます。ベースがキリスト教的な思考になっていると思つたんです。信仰とか宗教といいますと、禅は他を見ずに自己を見る。彼等の理解というのはどんなですか。

伊藤： …スタンス・サンの知り合いの方はヨガをやつていて、心もあり、割と理解されたようでした。三人の方が少林窟に参禅したいと仰いました。

老師： 禅は解脱を主体にした行ですから、彼等にとって解脱、悟りについての理解はありますか？

伊藤： 僕はそこまで一人々々に突っ込んで聞いておりませんので分かりません。

老師： …ああ、成る程。ヨーロッパでは、二つ二つ少林窟風の坐禅の解き方、指導の仕方の方が、抵抗無しに受け入れられそうですが。

伊藤： …抵抗なく受け入れられると思います。その為にも、早く老師に来て頂いてご指導の程賜りたいと思つております。

老師： 分かりました。

伊藤： …スタンス・サンの参禅記が有りますので興味のある方はご覧になって下さい。

老師： …フランス語ですか？

伊藤： …はい。(大笑)

老師： …ところでスタンス・サンが、「ヨーロッパ少林窟道場」の窓口のような主旨のインターネットを立ち上げたこと聞きましたが。

伊藤： …少林窟道場を紹介するようなものを制作中です。

老師： …伊藤先生のフランス訪問、大変な成果であったろうと思つています。初めから多くを求めたら必ず失敗します。一個半個でよいのです。本物の一個半個を育てれば、それがおのずから星になり、月になり、太陽になつていくんですよ。

少林窟は多くを求めるのではなく、本物を求める宗風です。二つ二つで今回は大成功であったろうと思つています。今後もしつ伊藤先生宜しくお願いします。

伊藤： …有り難うございます。その時はまたカンパ宜しくお願いします。(拍手)

老師： …では、通常の茶話会に戻りたいと思います。初めての方、手を挙げて下さい。初めての方に感想をお聞きたい。

参禅者A： …大田区から参りました。感想と二つか質問でよろしいでしょうか。坐禅だとか、解脱だとか、悟りだとか、色々な言葉が有りますけれど、そもそも人間が存在していなければ禅も何も無いではないか。そんなこと関係ないじゃないか、と思つたんですけど。にも拘わらず、何故、こんな事をして存在しなければいけないのか、或いは存在させられているのか。二つ二つが私はずっと疑問に思つていたのです。

悟ると二つ二つは存在が消滅するということですか？

老師： …実に二つ二つで面白い、そして核心を衝いておる。私は二つ二つ質問はわくわくするんですね。二つの視点からお話する必要がありますかと思つています。

一つには、何故人類として存在するかという生物学的な因果関係からです。これは生物が進化していく過程上、自然発生的に両足歩行が始まって、知性の自己増殖型で概念を持つようになり、言葉を持つようになり、進化の中かから自然に発達したものです。だから、これは必然的に生まれた大自然の流転の一環なんですね。

つまり、言葉を生み、概念を形成し始めて急に知性が発達した結果です。知性によって虚像仮想世界を構築する。乃ち自己実要求と感情がもたらす衝動作用に拠って、著しく理想や欲望が刺激され、自分だけの觀念世界を形成するようになった時から、知情意の纏れ現象が起こり出したのです。これが自我であり葛藤であり惑乱現象です。自分で作った精神現象に、自分が振り回され持て余している様子です。

是れにより諸悪が生まれ、それらを何とかしようとして宗教や哲学が生まれたのです。又一方においては、そうした人間の苦しみ喜び感動願いなど、大凡誰もが内在している情動作用を形にしたものが、文化といつものです。芸術です。音楽然り、絵画然り、彫刻然り、文学然りです。

ところが是の正体不明の実体無き心だけは、如何に知性の限りを尽くした哲学も宗教も、根底的解決は出来ない靈体なので、どうすることも出来ないのです。何となれば、知性も感性も意志も、心のほんの一部の作用でしかないからです。この事を又、知性自体が自覚することが出来ない、超時間的、超空間的存在だからです。心の作用は、全進化過程の超時間的存在だと言つて可いのです。つまり、計り知れない長い時間を掛けて、経験的に獲得してきた種の特異性として、是れまた計り知れない要求や反応傾向を、生まれた時から誰もが携えているのです。それが前世の因縁を携えていると言つて可いのです。人間らしく、犬らしく、牛らしく、それぞれの種を種たらしめているのはその為です。

心は又、空間的存在としても限りが無いのです。何故かと云つて、形や塊物としての本質的存在物が無いため、場所としての定まりが無いからです。言つなれば、全宇宙的であり、是れと云つて者が無いので、心なる者は何処にも何も無いのです。だから決定的に自由であり、それ故決定的に厄介なのです。

身体に内在する要因からも、矢張り無限なる全地球規模、全時間規模であることです。云つて云つて事かと言え、有情である動物も植物も、元はたった一つの単細胞に過ぎず、それが超時間的縁の流転によつて、今日のような多彩にして華麗な生命進化と発展を遂げたものです。しかも、たった一つの命が育まれ分化し成長を可能にした物は、時間は勿論として宇宙に存在する水や鉱物質等あらゆる元素と、多要素を含む光りと多要素のガス等が、無常の流転と、絶妙な縁の関わりで拠つて成り立つた物です。

つまり、元は一つであり、一つの分かれであり、それぞれで在りながら同質的共有關係に在ると言つて可い。お互いが分身なのです。此処からも万物一体の様子が分かる筈です。自我を取り払い、生前の自然体になるを、我々の存在は個としての領域的な意識のテリトリーから解放されて、全くと同化し一体融合するのです。それは人間の計らいによる汚れ、即ち時間空間的諸条件に束縛され、狭隘化された自己から解放された瞬間なのです。

このよつな時、風の心も雲の気持ちも、若や山の声も確かに伝わってくるのです。そのよつな限りない優しさで隔て無き心が、風となり雲となり、若や山となつてゐるからです。ですから本来の、天地と同根万物と一体なる大自然に還つた時に起る、一種不思議な感覚的現象も、不思議な事ではなく極当然な出会いに過ぎないのです。

坐禅しなくても、このよつな一瞬は、誰でも生涯幾く度も在るものです。

じゃあ、何でこんなに素晴らしい精神が、知性や感性が煩惱に成つたりするのかといつ疑問も、大変含みがあるものです。煩惱といつのは貪瞋癡。つまり貪りや妬みであったり、恨みであったり怒りだったりで、人間性を著しく破戒する精神作用です。健全な共存的關係性を破戒をする根本原因です。

又この根本原因がアホらしいほど単純なので、呆れてしまいます。生命誕生とその発達と類似しているのも面白いです。

「」で皆さん出合つていますけれども、いきなり殴り合い殺し合つては絶対に無い事です。然しそこに、対立抗争の特殊な環境に成つた場合、各自の自尊心を著しく傷つけ合つたりしたら、それが波風を立てて感情を刺激し

ます。それが激しくなるに連れて倫理道德性は、強烈な衝動力によつて簡単に退けられてしまつたのです。

即ち、今、今、是の瞬間、瞬間に於いて、自覚と意志に基ついて作用する、健全と称する精神は極めて無力だと言つて可い。その理由は、過去世の内在精神である動物的精神、つまり弱肉強食の残忍性や攻撃性が主力となるためです。知性の何処かで、それは違つてと叫ぶ人間的な自覚が有つたにせよ、超時間的、超空間的在来精神の持つ支配力は絶大な者です。種や国家の存亡とか、信仰や魂が侵されたとか、愛する者や家族とか生命の危機に直面すると、血の気の多い者ほど自然発生的に殴る蹴る、殺すといつ行動に及び、も、こつしたちゃんとした因果関係が有るからです。

事の発端は、ただ、念がぼんと湧いて出てきた事によるのです。今、今、その時その時、発生する念が動物的本能に由来し始めたなら、相手に勝ちたいと言つ弱肉強食の念がエスカレートして行く。我々が過去世を背負つた生き物である以上、この荒々しい動物的精神作用からは、容易に脱却することは出来ないのです。知性とか理性とか教養とか言つてますけれど、それら自体が空なる作用です。そんなものは過去世の一念によつて簡単に吹き飛ばしてしまふ。

本来のハードに秘められている歴史的な業、即ち貪瞋癡の煩惱が我々に粘着している限り、何時現れるか分からない、たつたの一念が大変なことを起こす訳です。これぞ正に煩惱です。諸悪の根源です。

従つてそのようなものを強く刺激する言動とか環境を、如何に作らないよつにするかです。正に一人々々の心の自覚と浄化に掛かっているのです。これを解決付けることを悟りといつたのです。どうしても禅が必要だし、どうしても修行しなければ解決出来ない大問題です。

人間が居なければ存在も分からないし、法も存在しないので、是も無ければ非も無い。ただただ、自然の環境がそこに無常の流転のまま存在だけです。人間が眼耳鼻舌身意の意を持ったために、存在を認知し、自他を認知し、是非を認知し、していい事悪いことを認知し、生死を認知し、恐怖や悲しみや喜びを認知する。つまり意に拠つて存在が始めてはつきりしたのです。

言つなければ、この時宇宙が生まれたのです。釈尊は是れを、三界唯一心造と云われました。この宇宙は、われわれ人間が意を携えた時、始めてそこに存在したのです。この意によつていさゝか浮かび上がり、存在してゐる。又これに拠つて迷いが始まつたのです。

それでいさゝか、貴方が言われた、悟りとは存在を超える、忘れることではないかと。正にそのなごです。意に拠つて存在している世界だから、この拘る意、認める意、執着を起す意。根本である是の意を超えてしまつたら存在が無くなるのは当然でしょう。我を忘れる。無我とはその事です。自我としての意が亡くなつたり、即宇宙大です。テ
リ
ー
が
無
い
か
ら
い
す。

どうしても一切皆空に行き着くしか無いのです。つまり悟ると云つたのは、一切の存在を一回超えることです。だが無我の世界は無我に成つてみなければ分からない。無我に成らなければ全てが治まらないし、過去世の一切も解決しないのです。

無我になるためには、一つ事に没頭して我を忘れさせることです。してあるその事を忘れ、している自分を忘れると、無我の方からやつて来るのです。徹すると身と心が一つになり、隔てが取れて身心一如となり、そのまま心身が脱落して無くなるのです。この明確な消息が悟りです。これを獲得するための坐禅であり修行です。以上でよろしく
ご
い
ら
い
な
さ
い

参禅者A・・・正直理解出来ない、と言つたり、本来説明すべきでないところを説明して頂いたという。そこまで伝えられる物では無いという。まあ、言葉で聞けばそういうものかなという気がするんですが、先ほど仰られた、意が生じたから人間的なものが生まれたのですが、意は何処から生じてきたのか、というのが疑問なのです。どんな原因を探っていくと、最後に行き着くところがあると思つたんですけれど。そこが何んなのかということが知りた

い。そんな物が知性で捉えられる物では無いかも知れないですが、一番最初の、何故それが存在したのか。その存在があつて、それがどうして派生したのか。派生しなければならぬのか、と言つ事がやはりしつくり来ないので。老 師・ 貴方の疑問は良く分かります。自由闊達な心は、心無所住而生其心です。まさに住する処無くして而も其の心を生ずです。そうした機能が有るために、縁に応じて知性は知性として、感性は感性として、瞬間瞬間作用し、瞬間瞬間流転して、生滅を繰り返す、これが心です。それだけです。それ以上も、それ以下のものも無い、今、それ自体で全てです。

意が何処から生まれたかを知りたい、と言つことも分かります。しかし、心の正体は、先ほども言ったように何も無いのです。ですから生まれる処も無く、又消えて行く処も無いのです。幾らこの事を、知性を駆使して推考し尋ね廻しても、本来無いのですから、決して貴方の求める解答は得られません。有ると思つても無いのが心であり、無いと思つても有るのが心です。だから、縁に依つてそのように働く靈体と言つていいのです。

有るとしたら、今、この瞬間、眼耳鼻舌身意が、色声香味触法としての感覚作用を知覚し意識している事実。それは場所的な存在でもなく、精神的特別空間的存在でも無いのです。だから貴方の言つ、行き着く処などは何処にも無いのです。今、是の瞬間の作用でしか無いので、本当の心を知るためには、是の瞬間に徹するしかないのです。そこが心の生まれる処、滅する処であり、それが心そのものであり、行き着く究極が今、この瞬間です。

意が何時、何故存在したのか。どういつ動機で意が存在したのか、それがどうして派生したのか、と言つ事は先ほど言いました。ところが次の、意がどうして派生しなければならぬのか、と言つ質問は、私も三世の諸仏もその外のことではありません。

意の派生を分化と広がりや多様化と云ふなら、善し悪しは別にすれば正に成長そのもの様子と言つていいになります。どういつこの子が私の子でなければならぬのかとか、この人がどうして私の親でなければいけないのかと言つた疑問には、普遍的な答えなど何も無いのです。日々自然の縁に依るもので、而も縁自体が無自性空ですから、その必然性を見つけ出そうとしても、全く無理であり意味の無いことです。

赤ちゃんには眼耳鼻舌身意がありながら、意が未だ作用せず発生しておりませんから、命に関わる空腹であったり、暑さ寒さであったり、危機的な状況だったりすると、泣いて状態を知らず。この中には別に意が有る訳じゃないのです。前因縁による生命維持のための自然の妙智力です。それこそ生命進化の過程で勝ち取つて来た能力です。意ではないと言つていいです。

般若心経に出てくる意は、言語を携え意味や概念を獲得して、是れは何何だから何何だと言つ思想回路が出来て、それをを用いる、それを意と云つていいです。だから法になるのです。

存在を認識するだけの意と、認識している自分を認識する意とは、作用に天地の違いがあるのです。前者の意からは文化や哲学や科学は生まれません。況や宇宙は存在しないのです。幼児や他の動物に意が有るにも拘わらず、何らの文化も形成されないのは、意が法に成るまでの内容が無いからです。ですが拘りもなく対立もない自然の意です。隔てのない実に純粹で暖かい、自他不二の自由な意即心です。

後者の、自分の存在が自覚出来るようになった時の意は、確かに知的所産の計り知れない力と働きは巨大なものです。今日の文明がそれです。しかしこの意は、認識している自分が自覚される、と言つ事は心身の隔たりを意味したものです。この隔たりの意が有るために、拘りを生み対立を起すのです。言つなければ自我煩惱にまみれた意なのです。

従いまして、私達大人の判断回路と判断材料と動機によつて、自由闊達に行為し行動しても、意が無ければそれらの全ては瞬間的作用でしかありません。と言つことは、過去も前後も全く無く、損得も是非も無い自然の働きの仮です。対立も無いのです。だから一切の問題が発生しないのです。

最も健全な意とは、前者の自然の意に拠つて、後者の高度な文化的意識的な意をコントロールする事です。理

論的には不可能ですが、禪的に言えば是れが自然であり本来なのです。

只見、只聞き、只考える時、意は無いのです。私たちは認識すると云います。この無限大の存在の中の、ある特定の物に意を用いた時に始めてそれを認識する。従って認識する時には、まず意がある。この意が無我であることを会得してしまつたら、意が意でありながら、天然の作用ですから、拘りの意では無くなるのです。つまり意を用い尽くしながら、意に毒されない。自由自在に判断回路も判断材料も駆使して、理想を実現していく本来の無我の意。自他不二の大乗精神が是れなのです。

是の意が諸悪を生むと言いましたが、この悪を為す意は、過去の引きずりである弱肉強食や勝他の意です。自我の要求と執着の意です。それが煩惱です。

それでの意、つまり心そのものが修行対象となっているのです。

これは貴方のご質問とはちよつとそれてきますけれど、例えば梅干しを口の中に入れる。酸っぱいと感ずるの意があるからではないんです。本来の機能がそつあるからです。何でこれに酸っぱいのか、と擬議すれば、そついう意が立ち上がった時なんです。従つて意を解決しようとするなら、味のままにしておく、天然の作用のままにしておく。意を持ち出さない、手を着けないことです。自らの発動する以前の、自然のままならば、意を超越しているのです。そこを真剣に工夫し練るのです。分かりますか？

参禅者A・・・正直なところ分かるような分からないような。

老 師・・・実際に本当の味とは何であるのか、何処から来るのか。と参究することです。

眼においても耳においてもです。とどななとどなな内容に捕らわれずに綿密に「何ぞぞ」何ぞぞと追究するのです。こつこつして意が起る元を究めるのです。実参実究自知する世界であつて認識論や概念の上で分かることは無いのです。大いに大疑団を起して、実参して、一瞬一瞬の本質に迫るのです。そこを間違えなければ、はたと手を打つて納得する時節が必ずやってくるのです。

参禅者A・・・有難うございました。

老 師・・・因みに貴方は何を勉強なつてきたのですか。

参禅者A・・・何をこつこつのはやうこつこつを言ひのびるか。

老 師・・・今のような質問が出るこつこつとは、哲學的精神的に相当深く洞察してきたとしか考えられませんから。

参禅者A・・・そつですね、仏教は全然分からなかつたのですが、一通り読みました。(・・・)よく聞き取れず。()

老 師・・・そりゃあ、大したもんですわ。その知識は後に生きてきますから。今は、究極の所に向かつて参究することです。折角の広い知識を活かすには、隔てを取つて身心一如に目覚めることです。時時、今、このままで究極ですから、邪念を加えず、只「する」のです。自然に任せて徹底純粹に「只「や」っていく。この工夫をして下さい。

参禅者A・・・有難うございました。

参禅者B・・・和歌山から参りました脇谷と申します。広島の道場では何度かお世話になってるんですけども、東京は始めてで、宜しく願ひします。

老 師・・・「苦勞様です。うわー嬉しいですね。又いらしてください。

参禅者B・・・有り難うございました。

参禅者C・・・神奈川から参りました笠原と申します。広島ではお世話になりました。その時は十日間お世話になつたのですが、ここでは四時間坐禅して、もう、厭つ。(大爆笑)雑念は消えず、囚われまくりの坐禅でした。また少林窟について修行させて頂きたいと思ひました。お願ひします。

老 師・・・はい、又お出で下さい。あのね、よしんば少林窟に来られたとしても、平素、言葉と言葉を繋いで思考し、比較をしたりして思考経をフルに動かしています。喻え少林窟へ来て、半日や一日は妄念妄想に振り回されるんです。波立ちてるバケツを置いて、波は直ぐには治まらないと云つてです。しかしじつと置いておけば

自然に治まるでしょう。

「こ」が急所です。騒ぐ心を何とかしなうとして、その上に計らいを重ねないことです。従って少林窟にきたら、何もなくて良いのですから、口ごじとしていましょう。一呼吸を真剣にしたらいいのです。今まで持ち歩いて揺らぶっていたバケツを置くのと同じです。自然に言語野が静まり、心が静かに成るのです。

最初の三四日のあの苦しみは、短くて済みますから安心なさなさい。しかし一日や二日は頭の波が治まらざるまで大騒動するといつ事だけは保証付きですから、覚悟しておいてください。

参禅者C・・・有り難うございます。

参禅者D・・・参禅の願いは如何様によれば。

老 師・・・道場に電話でもメールでも結構です。(以下略 インターネット上に詳しく載っております。)

坐禅そのものが初めてだといつ方に感想をお聞きしたいのですが。

時間が無い。では質問をしよう。

参禅者E・・・えー。あー。女性と関係を持つ時にも、そのような心持ちで関係を持つていてもよろしいのでしょうか。

老 師・・・そりゃ本人の世界ですし、何と言っても秘め事ですから、当人同士で好きなようにしてください。それが大事なのです。それがその時の道ですから。

参禅者D・・・そいつ風によつていくと凡欲の中に入っていくような気がします。果たしてそれが良いのか、又は心持ちでやっているのか、関係性の問題もありますので、どうなんだでしょうか。

老 師・・・好きだなあ、「こ」の破天荒な質問。(一 同爆笑)歴史的にですね、女性のお腹の上で悟った祖師もおります。だからと言つて、それは上々とはかり同じようなことをしても、そつはいかぬ。その時の縁が全く違つたからです。平素純粹に一生懸命端的を錬つてきて、時節が純熟していたからです。無我夢中になって成り切ったのです。真箇口を忘れて解脱したといつわけです。その行為自体に悟りの素養があるわけでは無さ。

全てが縁ですからね。縁は全て空ですから。平素心して一生懸命修行してあるものが、そついつ場に当たった時に、成り切つて我を忘れ空を体得するのです。我を忘れて情欲に落ちたのは迷いです。単なる淫欲です。

ですから貴方が悟りを目的にして真剣に努力してある時、束の間の一瞬の行為としてそついつ関係があつたとしても、それも修行でありたいと願つたならば、本当に真剣にせいなさいや。情欲に真剣になるのではないのです。行為に真剣になるのです。それだけのことです。

本当に真剣に菩提心が起きているならば、修行が気になりますから情欲に溺れることはしません。無いです。何となれば、本当の菩提心は他を見せなから。

しかし、喩え悟った人もそついつ機能を本来持っていますから、夫婦として必然的に起る自然な行為です。如何なる事でも常軌を逸してはならないのは当然ですから、健全な縁に於いては、お互いより効果的にするほど宜しいです。悟ったが為に、「こ」の機能が消滅したんじや人類滅びます。

悟つてもちゃんと機能しなければ嘘ですから。じゃ、道としての自由と不邪淫とは何が違つたのです。それはちゃんと弁えるといつことですよ。それが道です。していい関係としてはならない関係が厳然として有るでしょう。すべき人とすべき時にちゃんとすべきですよ。節操は保つていかなないと、人間としての自律が失われたら社会が滅びるたです。

又、夫婦として健全であることは、為すべき事をちゃんと為して、お互いを慈しみ愛おしむ事からです。そつする夫婦の関係は深く交われは交わる程に、通じ合い無条件の信頼関係になるのですから、寧ろしなかつたら不健康であり侮辱していいいこともありません。

必要且つ真に聖なる行為なのです。はじめと責任を伴った愛の結果としての行為でこそ、血の滴る暖かい人間であると同時に、崇高な靈的信念を持って命を育むに相応しい姿なのです。真剣に生きるからこそ、それが自ずから

秩序となり、道となるのです。真剣でなければ、その愛は忽ち朽ち果てしまつて、その行為は淫乱にして不潔です。本物の愛情には必ず秩序と責任が有るものです。情欲は種の継続と繁栄をもたらせますが、情欲に翻弄されると人の人世まで那落に落としてしまうので、喻え腹の上で悟った人が居たとしても、人の道だけは踏み外してはならんと言つことなんです。さまざまあみろ。(快笑)

でも久しぶりの過激な質問、面白かったです。この問題は、まだまだ言いたいことが有るんですが。

参禅者E・・・はい、有難うございました。

老師・・・では、よろしいでしょうが。

世話人・・・丁度五時になりました。これで茶話会を終わらせて頂きたいと思ひます。どうも、誠にありがとうございました。

一同・・・ご馳走様でした。

平成十六年二月十四日